

平成9年度 修復処置概要

修復技術部

1. 金属文化財の保存修復処置

重要文化財大谷古墳出土鉄製模造品、柚比本村出土鉄剣などの保存修復処理を行った。気化性防錆剤による鉄錆の安定化処理について研究を実施してきたが、柚比本村出土鉄剣の保存処理に応用実験を試みた。脱塩処理後の遺物を1%気化性防錆剤アルコール溶液に浸漬し、防錆剤を浸透させた後、プライマルMV-1を減圧含浸した。

2. 遺跡・遺構の保存修復処置

可曾利貝塚遺跡の住居跡の再保存処理を行った。可曾利貝塚は、昭和40年代の初め頃に水溶性アクリル樹脂（バインダー17）等で保存処理が行われているが、経年変化によりそれらの樹脂が劣化して再処理が必要になった。そのため数年前から横浜市三殿台遺跡の保存処理を契機に開発した土壤水分抑制機能を持ったポリシロキサン樹脂（ビホーマーER-002）を使用して処理実験を行い、その効果を確認するために観察を続けてきた。その結果が良好であることが判明したため再処理を実施した。処理効果を判定するために、温度計、pH計、電気伝導度計、PF測定装置を設置して土壤水分の変化を観察中である。

3. 平成9年度受託研究「塑像如信上人座像の修復」

この塑像は茨城県久慈郡大子町上金沢の法龍寺蔵で、江戸時代の製作と思われる。像背面に刻字と朱字で

本願寺第二世
如信上人真影
南無阿弥陀佛（朱字）
釈真和
源光圀（刻字に朱填）

とあり、水戸光圀が造像に関係あることが明らかである。

厚い座布団に置かれているこの座像は、頭部まで57cm、像底巾80cmで、玉眼とする他は全て粘土で造形し、その上に1mmほど和紙を貼り重ねて更に薄い紗を頭部、手部を除いて貼り、更に頭部、手部も加えて像全体を墨塗りにする。

像内部は胴部から頭部にかけて中空になっており、粘土が露出し、心木などは無い。ただ像底縁から腰部までは和紙が薄く貼られている。頭部の中空部には何も見うけられず、玉眼の工作も認められないが、頭頂部には円形の凹みがある。心木の跡か、頭頂の穴をふさいだ痕跡かがはっきりしない。

中空の粘土壁には荒いワラの跡も残され、他の部分は指で粘土表面をえぐった様な痕跡が残される。また腰部には径10cm程の円形の穴があり、そこには外面から和紙に包んだ粘土塊を押し込んだ部分がある。

この座像の破損は法衣の裾廻りに見られる。この部分は粘土の厚さが薄いために折損したものと思われ、一部は欠失している。また像の表面には打撲痕跡などが多く見られ、和紙がほころび、浮き上がっている。

修復処置は、発泡ウレタンで像背面を固定支持して横倒しとし像底を露出させ、粘土層をパラロイド B-72 キシレン 10%溶液で強化した後、粘土の欠失部を充填する塊をエマルジョンタイプのエポキシ樹脂（ダイナミックレジン）にマイクロバルーンを混和して整形し、その塊と周囲の粘土との接着をフェノリックマイクロバルーンを混和したエポキシ樹脂で行った。剝離している和紙層は、第1層と粘土との接着は酢酸ビニルエマルジョン、第2、3層の接着は澱粉糊で接着し整形した。

裾廻りと同形の集成材を漆塗りし、像をこれに載せて安定させた。

4. 重要文化財法界寺阿弥陀堂内陣壁画（土壁著色）の保存

平成8年度から行われている、重要文化財法界寺阿弥陀堂内陣壁画の修復について技術的助言を行うために昨年度に引き続き調査に参加した。9年度は、小壁を取り外す工事が行われたが、そのための養生、臨時の支持体への移転を行った際の材料に関する助言を行った。また、旧修理時に施されたと思われる暗褐色の汚れに対して溶剤テストを行い、それらがセメダインC、木工用ボンド、ポパール、アクリルの可能性が高いと推測している。



塑像如信上人座像